

《原 著》

^{99m}Tc-GSA dynamic SPECT による局所肝予備能評価： (II) 肝切除例における臨床的検討

黄 義 孝*

*金沢大学医学部核医学講座

要旨 ^{99m}Tc-GSA dynamic SPECT による局所肝予備能評価法を開発し、肝切除が施行された患者 72 例における術前肝予備能検査としての有用性について検討した。検査は術前と術後約 1 か月の 2 回施行した。術前検査は全例、術後検査は、術後早期に肝不全死した 2 例を除く 70 例で施行した。術前に決定したパラメータと術後のパラメータとの関係について比較を行い、術前検査にて術後肝機能の予測が可能か検討した。術後早期に肝不全死した 2 例は、いずれも術前に予測した残存肝クリアランスが著明な低値を示した症例であった。亜区域切除が施行された患者では術前と術後の全肝クリアランスの間に ($r = 0.900, p < 0.0001, n = 35$)、葉切除、区域切除の施行された患者では術前に予測した術後残存肝クリアランスと術後の全肝クリアランスとの間に ($r = 0.799, p < 0.0001, n = 35$) 良好な相関を認めた。この結果より、術前の検査にて術後早期の予後、肝機能が定量的に予測できる可能性が示唆された。

また、術前後での単位容積あたりの肝クリアランスの変化についても検討したが、亜区域切除例、切除率が機能的肝容積で 50% 以下の症例では有意な変化が認められなかったものの、切除率が機能的肝容積で 50% 以上の症例では有意な低下が認められた ($p < 0.01, n = 12$)。このことから、広範囲肝切除後の肝増殖過程において、単位容積あたりの肝レセプター機能が変化する可能性が示唆された。

(核医学 36: 323-331, 1999)